氏　名（本籍）	片野道雄（岐阜県）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	乙第32号
学位授与の日付	平成９年７月15日
学位授与の要件	学位規程第３条第２項
学位論文題目	唯識思想の研究
論文審査委員	（主査）教　授　小川一乗
	（副査）教　授　鍵主良敬
	（副査）教　授　箕浦恵了
	（副査）講　師　一郷正道（京都産業大学教授）

学位請求論文審査要旨

本論文は、筆者（片野道雄教授）のこれまでの長年に亙る唯識思想の研究を踏まえたうえで、改めて「唯識とは何か」という簡明な設問を視野に置きつつ、飽くまでも文献研究という学問領域から、唯識思想の本質を考察したものである。初期の大乗仏教において、般若経典群の出現は、大乗仏教の思想の本質を高揚し明確にしたのである。その般若の思想に基づきつつ、Nāgārjuna（龍樹、２c～３c）は、それを空観の思想として体系的に確立した。しかしその後、中期の大乗仏教の時代になると、大乗仏教を代表する思想体系としての唯識思想が、Maitreya（弥勒）→ Asaṅga（無着、４c～５c）→ Vasubandhu（世親、４c～５c）によって形成されることになる。これによって、龍樹を祖師とする中観学派と、新たに形成された唯識学派とは、あたかも車の両輪の如くに、インドにおけるその後の大乗仏教を展開せしめていくことになるのである。

ところで、龍樹によって確立された大乗仏教の基本思想が、何故に改めて唯識思想として問い直されたのであろうかという問題提起、この「唯識思想とは何か」という問いが発せられて久しい。この問題提起を視野において、筆者は「今一度、改めて瑜伽行唯識思想の形成が如何にしてなされてきたかについて、考察されなくてはならない」という論点に立って、本論文を作成

している。言うまでもなく、唯識思想の出現については、龍樹の空観思想が時代の経過とともに誤解され、特に実体論を主張するアビダルマ仏教や外道（仏教以外のインド宗教）から、あたかも虚無思想の如くに見なされるようになったため、改めて大乗仏教の基本思想を確認するために、唯識思想が形成されたのであり、従って、唯識思想は、空観思想と対峙するものではなく、大乗仏教としての空観思想に対する誤解を取り除き、それをより具体的に発展的に表現し直したものである、と言われている。このような言われ方は、唯識学派自身によってなされているため、インドの大乗仏教にあっては、龍樹の空観思想から無着・世親の唯識思想へと発展展開されたのであるという理解が定着している。しかし、実際のインド大乗仏教の歴史的展開は、そのような発展史的な理解を裏付けるものではなく、あくまでも龍樹を祖師とする中観学派によってリードされていくのである。そして、そのようなインドの大乗仏教の実情を踏まえ、8世紀以降からチベットに仏教が伝播されたそのチベット仏教において、11世紀頃から中観学派が二学流に区別されるようになり、その中の Candrakīrti（7 c）の学流である Prāsaṅgika（帰謬論証派）の中観思想が最も優れた大乗仏教であると位置付けられていくのである。そのように、中観学派の中の Prāsaṅgika の思想を大乗仏教における最も優れた思想として明確に位置付けたのが、チベット仏教における偉大な宗教改革者 Tsoṅ kha pa（宗喀巴、14c～15c）である。その Tsoṅ kha pa によって著作された『了義未了義決択論“善説心随”』（北京版西蔵大蔵経 no. 6142、以下『レクシェーニンポ』と略称）の前編にあたる「唯識章」が、筆者によって注目され、それに対する解読研究が持続的になされてきた、それに基づいた研究成果が本論文である。この『レクシェーニンポ』において、唯識思想に対するどのような了解が提示されているか、すなわち、そこにはインドの大乗仏教において展開された唯識思想についてのこれまでの了解とは相異した視点が含まれているのではないか、唯識思想についての単なる教理の説明ではなく、「唯識思想とは何か」という根源的な問いに関わる了解が提示されているのではないか、といった期待を持たせるものである。このような意味において、Tsoṅ kha pa の『レクシェーニンポ』の「唯識章」の解読研究が基礎となっている本論文の研究成果は、改めて「唯識思想とは何か」という課題に応答しようと試みたものである。本論文は以下の三部から成っている。

第一部　唯識思想の考察

序章　唯識思想の形成

第一章　唯識論書の成立考

—『摂大乗論』を手掛かりにして—

第二章　『レクシェーニンポ』の要項—「唯識章」—

㈠『解深密経』の提起する了義思想

(1)　経の中での矛盾を除く質問

(2)　その矛盾を除く答え

(A)　無自性と説かれる密意

(B)　不生などと説かれる密意

(3)　三性の自体の確認

(4)　それらによって達成される意味についての請問

(A)　経を引用する

(B)　その経の意味の若干の説明

(a)　経の言葉の意味を幾らか説明すること

(b)　未了義了義の方軌についての幾らかの説明

㈡　経文の意味がどのように説明されたかを述べる仕方

(1)　アサンガによる主に『解深密経』に基づく説明の仕方

(2)　それに基づいての真実性の決択の仕方

(A)　二辺を断つ仕方の一般的な説示

(a)「菩薩地」に説かれる仕方

(b)「摂決択分」に説かれる仕方

(c)「菩薩地」「摂決択分」より別の論書に説かれる仕方

(B)　増益の辺を特に否定すること

(a)　否定対象である増益を確認すること

(b)　その増益をどのように否定するかという否定の仕方

(c)　以上によって教説の未了義了義を区別する方軌

第三章　『レクシェーニンポ』による『摂大乗論』第二章第二十四節の所説の確認

第四章　「弥勒請問章」の三性所説にたいするツォンカパの解明

第二部　『レクシェーニンポ』の「唯識章」の解読

第三部　アスヴァブハーヴァ『摂大乗論注』の「序章」の解読

〔論文内容の要約〕

本論文は三部から成り、第一部が正しくの「唯識思想の研究」であり、その内容は、第二部と第三部におけるチベット語文献に対する解読研究に基づいている。

第二部における解読研究は、Tsoṅ kha pa の『レクシェーニンポ』（『善説心髄』）の序文と前編の「唯識章」に対する全文和訳である。『レクシェーニンポ』の「唯識章」は、Candrakīrti による Prāsaṅgika 中観説を大乗仏教の中で最も優れた思想と見なしている Tsoṅ kha pa 自身の立場から、唯識思想がどのように評価されているかを知る上できわめて貴重な文献であり、インド大乗仏教における唯識思想に対する解明とは別の視点からの独自の唯識思想への了解を伺い得るのではないかという期待を持たせる興味ある文献である。しかも、その内容は、唯識思想にとって根幹となっている諸文献を駆使した文献学的に豊富な内容のものであり、インド大乗仏教としての唯識思想をより的確に了解する上で、信頼できる示唆を含んでいる文献でもある。

また、第三部における解読研究は、唯識思想の基本的な文献の一つである『摂大乗論』の序章に対する Asvabhāva（無性）の注釈の全文和訳である。Asvabhāva の唯識思想は、すでに筆者によっても詳しく解明されているように、Vasubandhu（世親）などの理解解釈とは若干相違する一面を持ち、『摂大乗論』に対する注釈においても独自の了解を示すものとして注目されている。

このような第二部と第三部を構成している二つの文献に対する解読研究については、既に早くから筆者によって着手され、第三部に関わる Asvabhāva の『摂大乗論』に対する注釈に基づく研究成果としては、『インド仏教における唯識思想の研究－無性造『摂大乗論註』所知相章の解読－』（文栄堂書店、1975）という著書に代表されるが、それに至るまでの諸論文が発表されている。また、第二部の『レクシェーニンポ』に対する解読研究については「ツォンカパ造了義未了義論の試解(一)―チベット仏教の唯識受容についての一性格―」（『大谷大学研究年報』34、1982）に始まり、その後継続的に発表されている。それら一連の解読研究は、単に前編の「唯識章」だけに限定されるものではなく、『レクシェーニンポ』全体に対する解読研究を試みている成果である。尚、本論文の第二部として提示されている『レクシェーニンポ』の「唯識章」に対する解読研究については、筆者が『レクシ

ェーニンポ』についての研究成果を持続的に発表し始めた2年後の1984年に、Robert A. F. Thurman によって全文英訳され、Tsong kha pa's Speech of Gold in the Essence of True Eloquece（Princeton University Press）として公刊されている。

以下に、第一部「唯識思想の考察」の内容について概観する。先ず、第一部の序章「唯識思想の形成」においては、筆者は「唯識仏教の根幹となる「三性説」や「唯識無境説」や「識説」などの思索は別個の学場でなされてきたのではないかという見方もある。ここでは、そのような唯識思想の芽生えという点ではなくして、更なる展開を経て瑜伽行派の人々によって取り組まれてきた、総体としての瑜伽唯識思想の形成という点に考察の中心を置くことにしたい。そうでないと、唯識とは何か、という課題が具体的に見えてこないように思われるからである。」（2頁）と、本論文に取り組む自らの立場を述べている。そのような立場から、『解深密経』の序章に続く正宗（本論）の最初の「勝義諦相品」において、「如理請問」という名の菩薩によって仏に対して問いが発せられていることに注目している。「如理」とは如理作意（道理に随って思索すること）ということであり、この名を持つ菩薩による問いによって『解深密経』が始まっているところに、唯識思想の基本的立場があり、しかも、この名の菩薩によって問われ尋ねられている内容は、仏教における勝義諦（不可言説、無二相）であり、ここに「如理」による大乗仏教の勝義諦の解明こそが瑜伽行者にとっての中心的な課題であることが提示されている。そして、それに対する更なる思惟探究による確認が「無自性相品」における「三時の法輪」という所説として展開され、第二時と第三時の中心的課題が「一切諸法の無自性」という点で共有されていることから、瑜伽行者たちの如理作意としての思惟の対象は、不可言説、無二相、無自性、空という大乗仏教の地平にあったということが、先ず確認されなければならないというのが筆者の第一の了解である。このような了解についての証左として、『法句経』、『華厳経（十地品）』、『瑜伽師地論（菩薩地）』、『中辺分別論』、『摂大乗論』などが引用され、詳しく論究されている。

第一章「唯識論書の成立考―『摂大乗論』を手掛かりにして―」においては、先ず、唯識思想の形成の上での人脈、すなわち、Maitreya（弥勒）→

Asaṅga（無着）→ Vasubandhu（世親）における Maitreya が歴史上の人物か否かなどの位置付けについては諸説があるが、その Maitreya の存在と、『摂大乗論』において最も基本的な所依の教証として「アビダルマ大乗経」という名称をもって引用されている経典の存在とについて考察している。そして、Maitreya から Asaṅga への系譜における唯識思想の形成を考察していく上で、「アビダルマ大乗経」の存在が重要な意味をもっているのではないかという視点から論究が進められている。「アビダルマ大乗経」については、その名称から、伝統的なアビダルマ（法の研究）という在り方で大乗仏教の基本思想が説かれているというアビダルマと大乗仏教という重層性を持った教証としての経典という性格が伺い知られるが、この経典の存在については、従来、『摂大乗論』のチベット訳や漢訳に基づいて、固有の経典としての『アビダルマ大乗経』があり、その中の「摂大乗論」という一章を解説したのが『摂大乗論』という了解、或いは、『アビダルマ大乗経』と言われるような一群の経典類があって、『摂大乗論』はそれらに説かれているところを纏めたものであるという了解などが見られる。また、チベット文献を中心とした研究によっては「この経は、摂大乗論、あるいは、ある偈、更には摂大乗論以外の断片について、それが聖教たる性質のあることを表示した単なる呼び名である」（19頁）とも了解されている。筆者はこれらの了解について検討し考察を進めて、次のように結論的に推察している。すなわち、『摂大乗論』の造論の基本となっている教証としての「アビダルマ大乗経」は、固有の経典ではなく、Asaṅga によって教証として引用され、それは Maitreya 菩薩によって宣説されたものと推察している。筆者の言い方によれば次のようである。「アサンガの上にマイトレーヤ菩薩を通じて拝承される諸仏世尊の甚深にして広大な大乗の基本となる言教が、「アビダルマ大乗経」に帰せられるものとして引証されて、その聖教に基づいて講述、著作が開始されようとしていたと見なされなくてはならないのであろう。」（28頁）

第二章「『レクシェーニンポ』の要項―「唯識章」―」においては、先に触れたように、本論文の第二部において全文が解読されている「唯識章」の内容の要項である。この『レクシェーニンポ』において「了義」（真意が明確なもの）と「未了義」（真意が不明確なもの）が考察されているということは、言うまでもなく、大乗仏教における了義である「一切諸法は無自性・

空である」という教法が、どれほど明確に表明されているかということについての検討にほかならない。従って、大乗仏教の教法にとっての了義は何かと言うことではなく、大乗仏教の教法にとっての「一切諸法は無自性・空である」という了義はすでに明らかであり、そのことが唯識思想においてどのように表明されているかを究明しているのが「唯識章」である。

この点について、先ず、無自性ということについては、唯識思想では『解深密経』の「無自性相品」に説かれている「三無自性」によって、大乗仏教の了義が説示されている。三無自性とは、諸法の相無自性と生無自性と勝義無自性であり、これらは順次に唯識思想における遍計所執性と依他起性と円成実性という三性の本質を示しているのである。次に、一切法は無自性であるから、「不生・不滅である」という了義については、遍計所執性における相無自性と円成実性における勝義無自性に関する『解深密経』の所説を取り上げている。

次に、唯識思想において大乗仏教における了義がどのように説示されているかを、『解深密経』に基づいて確認した上で、そこにおいて「三時の法輪」が説かれているその所説の意味と内容についての検討がなされている。その検討の結果を要約すれば、第三時の法輪において主題とされているものは、第二時の法輪と等しいのであるが、自相の無（空）を一斉に説いている第二時の法輪に対して、第三時の法輪は、自相の有と無とを取り上げ対比して「善く分別された法輪」であり、それによって一層「無自性・空」ということが明確にされたと言うことである。そして続いて、大乗仏教における「一切法無自性」という了義が唯識学派の先師たちによってどのように確認されているかを検討している。

以上のように唯識思想における了義を確認した後、増益見と損減見という観点から唯識における基本思想である三性説について検討している。増益見とは「存在しないものを存在すると見ること」であり、損減見とは「存在するものを存在しないと見ること」である。この観点からみれば、遍計所執性は無であり、それを有と見なすことは増益見であり、依他起性は有であり、それを無と見なすことは損減見であり、円成実性は有であり、それを無であると見なすことは損減見となる。この場合に問題となるのは、「一切法無自性・空」という大乗仏教における了義の立場から、依他起性と円成実性とが、唯識思想において有とされている点である。この点については、インド仏教

における中観学派による唯識学派に対する批判の中心となっているものの一つでもあるが、唯識思想の立場からすれば、依他起性はまさに「空」として否定されるべき遍計所執性が起こる基盤として有であり、その依他起性を事体として起こっている遍計所執性は空であると転換された在り方こそが有としての円成実性である。譬えて「縄は蛇として空であるごとくである」と言われる。「蛇として空である」という遍計所執なる蛇は、依他起なる縄を事体として起こっているのであり、「蛇として空である」と確認された在り方が円成実なのである。このように、第二時の法輪は「一切法無自性・空」のみを説いたが、第三時の法輪においては、有と無との関係を具体的に設定して、そのことがより善く分別されたのであり、唯識思想はあくまでも「一切法無自性・空」という大乗仏教の了義を確認することこそを目的としているのである。

第三章「『レクシェーニンポ』による『摂大乗論』第二章第二十四節の所説の確認」においては、Tsoṅ kha pa の『レクシェーニンポ』の解読を通して、『摂大乗論』の所説についてのこれまでの了解の仕方において、再検討を要する一つの事柄について考察されている。それは、『摂大乗論』Ⅱ—24の始めについては、これまでのインド大乗仏教における唯識思想にあっては「また他に依る実存（依他起性）が、妄想された実存（遍計所執性）として現われながら、しかもその様にはそれ〔他に依る実存〕と同体ではないということが、如何にして知られるか。」（131頁）と解読されている中の「同体ではない」という了解について、これについて、Asvabhāva の注釈には「他に依る〔実存〕が妄想された〔実存〕の分として顕現していても、〔それ他による実存は〕かれ〔妄想された実存〕の自体ではないごとく、そのごとくに了解せしめんがために、名の〔仮説される〕前に知覚はないから、と語っている。」と注釈され、「自体を欠く」と了解されている点である。この点について、Tsoṅ kha pa は Asvabhāva の注釈を支持し、ここになされているのは、「遍計所執性は依他起性と同体であるか」という一異の問題ではなく、「依他起性は遍計所執性として空である」という問題についての設問であると了解するのである。この Tsoṅ kha pa の了解について、筆者は、Ⅱ—24のチベット訳は「他に依る実存が妄想された実存として顕れているように、〔他に依る実存は〕それ〔妄想された実存〕を本質としないというこ

とが如何にして知られるか。」というように、「本質としない」と解読されるべきであることを支持している。

第四章「「弥勒請問章」の三相所説に対するツォンカパの解明」においては、先の第二章における「唯識章」の要約の最後の部分に提示されている事柄についての考察である。本章で問題となっているのは、唯識思想において、龍樹の空観思想が第二時の法輪とされ未了義とされている点について、空観思想の所依の経典である『般若経』群の中の『二万五千頌般若経』の第七二章「弥勒請問章」において、唯識思想における三性説に類似した三相が説かれている事柄についてである。この「弥勒請問章」の所説は、サンスクリット文において伝えられているが、相当する漢訳には見いだされず、言うまでもなく、それ以前の『八千頌般若経』などの般若経典群においても見いだされない。この「弥勒請問章」における三相については、それを唯識所説の三性説と同一視する論者もインドにはいたが、Asaṅga や Vasubandhu によっては注意されていないこともあり、Tsoṅ kha pa は、「「請問章」の所説は『解深密経』のそれと一致するものではなく、「請問章」の所説では一貫して勝義として無、言説として有という『般若経』の立場が貫かれているとしている。」（151頁）と自らの了解を示している。

〔論文審査の要旨〕

本論文は、第一部「唯識思想の考察」が主論文であり、第二部と第三部は解読研究である。第一部は、特に第二部の Tsoṅ kha pa の『レクシェーニンポ』の「唯識章」に対する解読研究を中心として作成されたものである。『レクシェーニンポ』は、“了義未了義決択論”と言われているように、大乗仏教における了義である「一切法無自性・空」の思想が中観思想と唯識思想の中で、どのように表明されているかを究明した論書である。しかも、その著者である Tsoṅ kha pa は、龍樹を祖師とする中観学派の系列の中の Prāsaṅgika の思想を、大乗仏教の了義を明確にしている最も優れた仏教思想と見なしている者である。その Tsoṅ kha pa によって、唯識思想において大乗仏教の了義がどのように表明されているかを検討しているのが「唯識章」である。Tsoṅ kha pa はこのような自らの立場から、唯識思想の根本聖典である『解深密経』の「無自性相品」における三つの無自性を最大の手掛

かりとして唯識思想の了義性を究明しようとしているのが「唯識章」であるが、筆者は、その要項を解説する第一部第二章に先立って、まず序章において、唯識の根本聖典である『解深密経』それ自体が、大乗仏教の「一切法無自性・空」という了義を究明しようとしていることを、『解深密経』の最初の品「勝義諦相品」に登場する「如理請問菩薩」という菩薩名に注目して論究し、続いての第一章において、その大乗仏教の了義を、「アビダルマ」という仕方、すなわち、アビダルマ仏教における「法の研究」という仕方で、十項目で説示したのが唯識思想の根本論書である『摂大乗論』であることを、所引の「アビダルマ大乗経」についてのこれまでの諸見解を検討する中で究明している。

以上の内容に関して、唯識思想にとって重要なアーラヤ識説が「唯識章」において注目されていない点や、『解深密経』に説かれている「三時の法輪」において、中観思想が第二時の法輪とされ未了義とされている点などについては、Tsoṅ kha pa が、専ら唯識思想の了義性の解明に努めていることをこそ、そのことから知られると確認された。また、第二章における『レクシェーニンポ』「唯識章」の要項については、筆者は、第二部の解読研究において、その内容理解に全精力を傾けてはいるが、筆者の観点からその内容を分析了解するところまで至っていないため、かえって理解困難な文面となっている部分のある点が指摘され、今後、その課題についての筆者の研鑽が期待される。

続いての第三章と第四章は、インド仏教においてはそれほど問題とされていなかった課題について、Tsoṅ kha pa の指摘に基づいた検討がなされたものである。これらの点については、今後の唯識思想研究においても留意されるべきであることは言うまでもない。

第二部の『レクシェーニンポ』「唯識章」の解読研究について、すでに公刊されている Thurman の英訳と相違した解読がなされている幾つかの部分について、筆者はその英訳を承知しながら自らの解読を行っているのであり、Thurman 英訳の欠点を指摘する筆者の見識も確認されたが、そのことについて脚注において注記しておくべきであろう。

以上のような本論文において、筆者が改めて問うた「唯識思想とは何か」という課題についての解明がどれほど明らかになったかという点については、唯識思想といえども、大乗仏教の了義である「一切法無自性・空」を究明し

ようとしたものであるということが、Tsoṅ kha pa によって確認されようとした『レクシェーニンポ』「唯識章」を通して再確認されたことによって、本論文の目的は一応なりとも遂げられたと言えよう。今後、筆者は更なる研究・研鑽によって、唯識思想が真の意味で大乗仏教であることを確認する努力を継続することに期待したい。

〔最終試験及び語学試験の結果〕

本論文およびこれに関連する事項についての口頭試問・外国語学力確認の結果、筆者は学位規程の定めるところに必要な学力を有するものと確認された。